

[TOP](#) [子育て・教育](#) 「国際人として使える英語」の学び方と必要な努力

代表画像中 (TypicalImageM)



代表画像小 (TypicalImageS)



子育て・教育

「国際人として使える英語」の学び方と必要な努力

【グローバル人材が育つ家 特集】(3) 幼いころに母語を大切に作る意識が、言葉のセンスを育む。英英辞典、アウトプット、フィードバックを大切に

グローバルな時代に必要なスキルと言えば英語です。英語ができれば活躍の場は世界中に広がります。日本にいたとしても、公用語が英語という会社も増えてきますし、グローバルな部署に配属され、英語が必要になるかもしれません。自分は苦手だけれど、わが子には英語を身に付けさせたいと考えている親も多いのではないのでしょうか。そこで特集第3回では、グローバル時代の英語の学び方を2人の専門家に聞きました。

【グローバル人材が育つ家 特集】

- (1) [将来世界のどこでも活躍できる「3つの能力」とは](#)
- (2) [竹内薫 リビングの本棚から教育は始まっている](#)
- (3) 「国際人として使える英語」の学び方と必要な努力 ←今回はココ
- (4) 夏野剛 多様性を受け入れ、尖った才能で突き抜けろ
- (5) グローバル親座談会 海外留学に成功する家しない家

グローバルと言っても求められる英語レベルは異なる

認知科学や発達心理学を専門とし、人が言葉を学ぶ過程を研究している今井むつみ慶應義塾大学教授。「子どもをグローバル人材に育てるためには、どのように英語を学ばせたら？」の質問に「そう考えている親御さん自身はグローバルでしょうか。子どもにグローバルになってほしいと思うなら、親がグローバルにならないといけません」と鋭いひとことを放ちます。

「語学というのは投資と同じです。むやみに学ばせるのでは、時間もお金ももったいないもの。子ども自身がやりたいこと、その分野でグローバルになるにはどのくらいのレベルの英語が必要かをまず考えましょう」

今井さんによると、グローバルに活躍したいという高校生に話を聞くと、国連やユネスコ、ユニセフで働きたいという生徒が多いのだそう。「多くの人の『グローバル』な未来のイメージもそういったものでしょう。しかし、グローバルに活躍している人はそれだけではありませんよね」

確かに世界で活躍している日本人、と考えると、サッカーや野球の選手、バレリーナ、音楽家、料理人など色々な分野の人が思い浮かびます。医学やIT、ロボット工学の最先端研究者もいます。

グローバルに活躍する人は語学の「センス」を持っている

「グローバルに活躍する人たちが、等しい英語力を必要とするわけではありません。スポーツ選手に必要なのは、チームの仲間と意思疎通ができる語学力です。研究者、ビジネスマンも、それぞれ仕事に必要な英語のレベルは違います。また、パレエや音楽、スポーツなどで留学する人も、日本を出発する日までに十分な語学力があるとは限りません。しかし、語学ができないから留学しなかったという話は聞きませんよね。実際、留学できるレベルまで学ぶ体験を重ねてきた人には、『学びのセンス』が身に付いているので、留学してから、現地で自分の目指すことを学ぶことを通して、語学力が追いついてくるのです」

今井さんは、英語学習では「スキル」と「センス」の両方を身に付けることが必要で、幼いころには「センス」を意識した働きかけが大切だと話します。それは英語でなくてよいのだとも。語学における「センス」とはどのようなことでしょうか。その意味や役割、センスの身に付け方を詳しく聞いていきましょう。



<次のページからの内容>

- センスがある人は「物は言いよう」を実践できる
- グローバルなレベルでは相手に合わせた話し方、文が必要
- 言葉の「センス」は母語を通して育まれる
- スキルとセンスは両輪。スキルを磨くことでセンスが身に付く
- 親が内向きでは子どもはグローバルになれない
- インターネット時代に英語を書くことはますます重要になる
- 英英辞典活用、アウトプット、フィードバックがキーワード
- 単語のつなげ方まで分かる英英辞典
- 文が作れたらアウトプット。フィードバック後の修正で話す力が付く

センスがある人は「物は言いよう」を実践できる

英語学習における「スキルとセンス」のうち、日本で重視されているのはスキルだと今井さんは話します。スキルとは、単語をたくさん覚えたり、文法的に正しく書けるようになったり、正しい発音で話せるといったことです。もちろん、スキルは大切です。しかし、最終的に一流かどうかを決定づけるのは、センス次第なのだと言います。

センスという言葉で思い浮かぶのは「ファッション」の分野です。「あの人はセンスがいいね」というように、洋服を選んで組み合わせ、スタイリッシュに見せる「感覚」を表す言葉として使われます。今井さんは「その『感覚』は学ぶという場面でも重要。言語だけでなく、数学やスポーツ、音楽などにおいても、センスを養うことは大切です」と話します。

それでは言語に於いて、センスとはどのようなことなのでしょう。

『物は言いよう』ということわざがありますね。同じことを伝えるにしても、言葉の選び方や言い回しによって、理解のしやすさや、どんな印象を与えるかが変わることです。言葉のセンスがある人は、文章を書くときも話をするときも、常にこのことを意識しています。

グローバルなレベルでは相手に合わせた話し方、文が必要

話したり書いたりするとき、自分が分かっていることは相手も分かっていると思いがちですが、立場や環境が違くと、相手に見えていないことはたくさんあります。相手の立場に立ってみると、人の話を理解するためには常に行間を埋める作業が必要になります。そんなとき、相手がなるべく無理なく行間を埋められるように、状況に合わせて情報を提供できることも、言葉のセンスがあるといえるでしょう。

外国語に関していえば、ある日本語の内容を英語で言おうとしたときに、一言一句を英語に置き換えようとすると、かえって読みづらいものになってしまうことがあります。一方、センスがある人は、文意を汲み取って、『日本語ではこういうけれど、英語だと別の言い方をした方が伝わりやすいよね』というふうに考えることができます。元の文とは全く異なるストラクチャーの英文になるかもしれません。しかし、ネイティブにとってはその方が理解しやすい言い方で、言いたいことも誤解なく伝えられるでしょう。

大切なのはその言葉の文化的な背景まで把握して、ネイティブの人が読んだり聞いたりしても、自然に思える文が作れること。それには、単語の使い方や豊富な語彙、正しい文法など、多くの知識が必要となります。その知識を獲得しようという探求心も言葉のセンスに必要な要素です」

言葉の「センス」は母語を通して育まれる

あることを言いたいとき、その言語ごとに適切な言い方があります。母語ならたくさんのインプットを聞き、自分も話す練習をする機会がたくさんあるので、その使い分けは自然に身に付くものです。しかし外国語については、「言葉に対する探求心、つまり言葉のセンスがないと、適切な単語や言い回しの選び方を身に付けるのは難しい」と今井さんは話します。

今井さんは以前、似た意味を持つ動詞の使い分けを外国語の学習者がどこまで習得できるかを、外国語学習者とネイティブ(母語話者)で比較する研究を行いました。ネイティブは、5歳レベルまでの使い分けができるようになった後も正確な使い分けに近づいていきましたが、外国語学習者の多くは5歳レベルのままに留まったそうです。「しかし、その中で一部の人は、語学力が伸びていきました。それは、やはり言葉のセンスがある人たちだったのです」

繰り返し出てくる言葉のセンスというキーワード。これはどのように身に付けばよいのでしょうか。今井さんは「小さいときから母語に対して関心を持ち、言葉の使い方に注意を払う姿勢が大切です。本を読んでいて、知らない言葉が出てきたら『どういう意味だろう』と疑問に思ったり、Aという言葉が出てきた時に、『この文脈ならBという言葉も使えそうだけど、なぜAが使われているのだろう』と立ち止まって考える経験、伝えたい相手に対し、この言い方がふさわしいか想像すること。そんなふうには、言葉に注意を払い、思考する。この積み重ねで言葉のセンスは磨かれていきます」と話します。「言葉のセンスは外国語でも共通です。センスがあれば、外国語を学ぶ際にも、必要なレベルで習得できるでしょう」

スキルとセンスは両輪。スキルを磨くことでセンスが身に付く

センスを身に付けるには、スキルを磨くことも必要だと今井さんは話します。「何かを極めるということは、スキルを磨きながらセンスを身に付けることです。つまり最初はセンスよりスキルが先行します。しかしスキルだけでは、何かを正確に再現するといったレベル以上には行けません。本当に優れている人はある時点から、センスが先行するようになります。それが超一流ということです」

親が内向きでは子どもはグローバルになれない

今井さんは「『グローバルに活躍するための英語』というとき、どんなレベルの英語が必要か分かっているでしょうか」と疑問を投げかけます。外国語を学習するのは投資と同じです。とても長い時間を使うからです。さんざん投資をした結果、全然使わなかったら、その時間ももったいないと思いませんか？ 英語を学ぶこと以外にいくらでもやりたいことがあったと思うはずですよ。ですから、どのレベルが必要なのか、という見極めはとても大切です」

「子どもをグローバルに育てたかったら、親も世界に目を向けてほしい」と今井さんは話します。「心理学の研究では、言葉ではっきり言わなくても、親の価値観は子どもに伝わるのが分かっています。親が国際ニュースを見たり、新聞の国際欄を読んだりして、グローバルな視野を持っていれば、子どもは自然と興味を持つでしょう。それが子どもをグローバルに育てる近道なのかもしれません。

「グローバル社会において英語は不可欠ですが、道具にすぎません」と今井さん。英語の習得を第一目標にするのではなく、サッカーにしろ音楽にしろ、子どもが一番やりたいことを徹底的にやって、世界に目が向いたときにこそ、英語が必要になるのです。大切なのは、そのときに備え、言葉のセンスを磨いておくことなのでしょう。

インターネット時代に英語を書くことはますます重要になる

[特集第2回の記事](#)に登場した竹内薫さんは、自ら設立したインターナショナルスクールで、日本語、英語、プログラミング言語のトライリンガル教育を行っています。自身もNYで小学生時代を過ごし、カナダの大学院への留学経験もあるバイリンガルです。

竹内さんは「ネットリテラシーには十分な注意が必要ですが、インターネットを英語で利用すると、世界は大きく広がります」と話します。「日本語の情報ではデマなのかニュースなのか分からなかった情報も、英語で検索をしていくと、ニュースソースまでたどることができます。英語で発信すれば、届けられる範囲が膨大に広がります」

グローバル時代は、自分で考え、英語で発信する力が必要という竹内さんに、グローバルな英語力をつける方法を聞きました。

英英辞典活用、アウトプット、フィードバックがキーワード

「日本人は英語の読み・書きはある程度できると言われていますが、実はそうでもありません。研究者レベルでも、英語の論文を誤読したりします」

英文を書く場合も、元の日本語がすぐに思い浮かぶような逐語訳が多いのだと竹内さん。「インターネット化が進むグローバルな社会では、きちんとした英文を書く力が求められますから、それでは通用しません」

竹内さんは、これらの原因は、学校の英語授業ではアウトプットとフィードバックの場が絶対的に不足しているためだと話します。また、実用的な英語を身に付けるなら、英英辞典を使ったほうがよいとも。それはどのような理由からなののでしょうか。



単語のつなげ方まで分かる英英辞典

「言語の基本は、『話す・聞く』力です。とりわけ、話せることは大切です。人は自分が話せる言葉は聞き取ることができ、書くこともできるからです」。話すことを飛ばして、読み・書きばかりやるのは、野球の実践練習をせずに、ルールブックの勉強ばかりするようなもの、と竹内さんは話します。

話す訓練の前提として「知らない単語が出てきたら英英辞典で調べたことを子どもの頃から身に付けさせるとよい」のだそう。「英英辞典で調べるとその単語が、どのような文脈で使われるかが分かります。どんな前置詞と組み合わせるのかも分かるので、他の単語につなげられるようになります」。

「つなげられる単語が、2つ、3つと増えていくと表現できる内容がどんどん豊かになるでしょう。単語を10個くらいつなげられれば、言いたいことはほとんど言えます。それと同時に、実際に英語話者と話す体験もさせるといいですね」

文が作れたらアウトプット。フィードバック後の修正で話す力が付く

話す場は、英会話教室でも、インターネットのオンライン英会話でもよいそう。「自分で考えた英文を話す＝アウトプットしてフィードバックを得ることが大切です。相手の英語話者が『そこはこういうふうに言うんだよ。そのいい方は過去形にしようね』というふうにフィードバックしてくれることで、知識が修正され、より正しく話せるようになります。

話せるようになったら、それを書いてみればよいのです。書いたものも添削してもらいましょう。フィードバックがあることにより、自分の英語伝達能力がどのくらいのレベルかが分かります。それがないままだと、自分ではできていると勝手に思い込んでしまい、大変危険です。

『話す』ということが基本となり、『聞く・書く・読む』ができるようになるのです。『わが子をグローバルに活躍する人に』と願うなら、家庭ではアウトプットを意識した英語活動を行うといいですね」

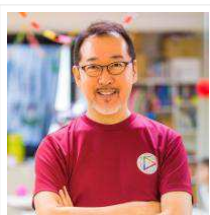


今井むつみ



慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知心理学、発達心理学、言語心理学。1989年、慶應義塾大学大学院博士課程単位取得退学。1994年ノースウェスタン大学心理学部Ph.D取得。1993年より慶應義塾大学環境情報学部助手。専任講師、助教授を経て2006年より現職。著書に『学びとは何か——<探究人になるために>』、『ことばと思考』（いずれも岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）など。訳書に『科学が教える、子育て成功への道』（扶桑社）。

竹内 薫



日本語、英語、プログラミング言語で教えるトライリンガル教育のフリースクールYES International School横浜校、不登校・ホームスクーラーの学びの拠点となり、サポート支援するYES International School東京校長。東京大学教養学部教養学科（専攻：科学史・科学哲学）、東京大学理学部物理学科卒業。マギル大学大学院博士課程修了（専攻：高エネルギー物理学理論）。理学博士（Ph.D.）。大学院を修了後、サイエンス作家として活動。物理学の解説書や科学評論を中心に100冊を超える著作物を刊行。物理、数学、脳、宇宙など、幅広い科学ジャンルで発信を続ける。テレビ、ラジオ、講演など執筆以外にも多方面で精力的な活動を続けている。

取材・文／福本千秋（日経DUAL編集部） イメージカット／PIXTA

1～3歳 4～6歳 7～9歳 10～12歳 習い事